

## 5) オオデマリ＝大手鞠

オオデマリはスイカズラ科の落葉低木で高さ 2～3m になる。北は北海道から南は四国、九州まで栽培することができる丈夫な花木である。もともとは『藪手鞠』(ヤブデマリ)という品種で、本州中部以南、台湾、中国に自生する。これを園芸的に改良したのが本種で、このため花はすべて中性花で、雄シベも雌シベも退化しており種子はできない。別名を『繡毬花』(テマリバナ)ともいい、花は 5～6 月頃に『紫陽花』(アジサイ)に似た**集散花序**を付ける。咲き出しの花の色は少し緑色を帯び、次第に色が抜けてやがて純白になって、散り際には再び青みを帯びてくる。日本種は白色以外の花色はないが、西洋種には淡いピンクの花もある。花房は大きくてよく目立ち、成長力も旺盛で枝がしなうほどに花をびっしりとつける。花をよく見ると花弁は 5 裂するが不揃いで、裂片は丸くて花序全体は球形に近い。これが大手鞠といわれる理由にもなっており、江戸時代に開発されたものと思われるが定かではない。文献上では 1684 年に刊行された生け花に関する書物『立華正道集』(リッカショウドウシュウ)に見られるのが最初である。その後貝原益軒が著わした『花譜』(カフ)では

花はあぢさいに似て、かたち手まりのごとし。正月枝を切りさすべし。

低き枝はとり木にすべし。花ひらくとき色白く、後には青くなる。

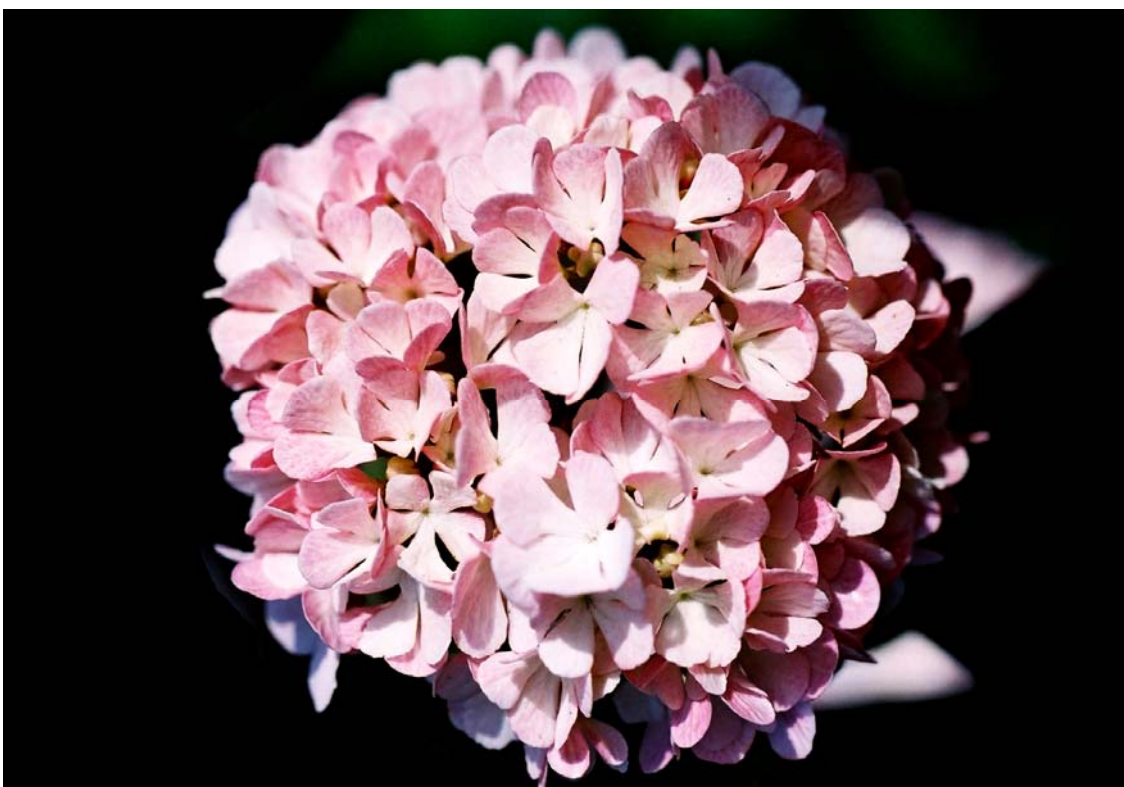
と記されている。近縁種には積雪の深いところに自生するケナシヤブデマリ、富士山麓にはチャボヤブデマリがあり、後者は盆栽などにされている。

オオデマリの植え場所は肥沃で陽のよくあたる場所がよい。適潤地なら土質は特に選ばないが、基肥として堆肥を多めに入れて、置き肥として油粕を与えるとよい。繁殖は『花譜』に語られているように、挿し木もしくは取り木を行なう。

ここで挿し木と取り木のコツについて少し触れておこう。挿し床としては鹿沼土や赤玉土がよいようである。挿し木をする直前に発根促進剤を切り口に付けておくと、活着率が高くなるものもあるので、これを利用するのも一方法である。しかし普通のは鹿沼土の挿し床があれば十分である。その理由は鹿沼土の特徴として、雑菌類が少ないこと。水持ちがよく、かつ水捌けがよいこと。土質が柔らかく発根した根を優しく包んでくれること。などの理由によるものである。しかし挿し木は、時期とその後の管理の方が大事で、水やりと日光の管理を失敗すると全滅してしまう。葦簀や寒冷紗をうまく用いるのもよいだろう。しかし取り木の方は意外に難しい。ただ土の中に枝を埋めておくだけでは発根しない。植物の枝を断面から見ると、一番外側は外皮という組織で、その内側は内皮、その更に内側が形成層、そして一番内側が木質部になっている。取り木で大事なことは、この内外皮を長さ 3cm ほど、鋭利な刃物で剥いで形成層の部分を露出させて土の中に埋めておく事なのである。植物の根は何処からでも出てきそうだが、形成層以外のところからは発根しない。形成層を露出させて、鹿沼土に埋めたり、水苔で包んでおくことがコツなのである。



オオデマリの花はアジサイによく似ている。学名は『*Viburnum plicatum*』で、種名の意味は不明だが、種小辞はプリーツのヒダがあるという意味で、凹凸のある葉の形状に由来する。



西洋種のオオデマリには、淡いピンクのものがある(栽培品)。





近縁種のカンボクの花。オオデマリに先駆けて連休の頃に咲き出す。秋の紅葉も素晴らしいため、家庭でも栽培されることが多い。学名は『*Viburnum opulus*』である。



カンボクは独特の色に紅葉するので、すぐにカンボクと分かる(長野県軽井沢町)。 [目次に戻る](#)